

## 患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表  
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの(株)フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第57回 患者中心の医療の本質を求めて

「患者中心の医療」が囁かれているが、一向に進展していない感じがする。「本当の患者の声」がないまま医療が

進んでいる。非常に危ない気がする。

また医療者の卵に対する教育面、実践面でもその傾向が強い。教育面で

## 医師も“患者の声”聞いて

は看護学生とはがんサロンに出入りして対話する機会が多いが、医学生とはめったに出会えない。看護学生には「患者の声」を聞くと言う姿勢は多く見受けられるが、医学生にはあまり感じ取れない。医師指導教官が「患者の声」らしき事を教えているが患者の生の声ではない。

さらに実践面では看護学生には講義したという話しはよく聞かすが、医学生は別ランクで講義し、患者が登壇し講義したという話しはあまり聞かない。ワークショップで「患者役」を作って演習しているが、患者になったことが無い人に本当の患者役は出来ない。

医療技術に特化して学び続けて、患者の事まで気が回っていないのだから。患者が登壇し講義すれば、Q&Aも生々しく出来るし、患者の心を掴むことで患者に好かれ、患者に優しい医師になれる。そうすれば、あたたかな「病院、優しい」病院が出来ることではない。

世の中、日々変化しているのに。その上、内視鏡検査を受ける際、一方通行の誓約書を書いた。病院側から患者側のみへ書く誓約書。病院側からも「万全を期す」程度の書面を書いてくれないかと思うが、これまで一度も貰ったことはない。

2011年以降、毎年島根県下の病院長とがんサロンとの意見交換会が継続して開催されていることは、患者側にとって誠に有難いことだ。全国の県もこんな会合は行っていないだろう。これこそ「患者中心の医療」の本質と言えるのではないだろうか。